創立100周年

式典五百余名が参列

一億円グラントの採択発表

日本歯科大学創立100周年記念式典は、六月一日の本学創立記念日に東京富士見において挙行された。

日本歯科大学創立百周年記念式典は、六月一日、教職員、卒業生、学生等五百余名が参列して、生命歯学部本館八階富士見ホールにおいて挙式された。

定刻午前十時三十分、米澤登庶務部長が開式を宣し、雅楽が荘重に響きわたるなか、神職が参入した。

神事につづいて、本学百年の沿革が祝詞の中で朗々と奏上された。ついで玉串奉奠に移り、中原泉理事長・学長が神前に進み出て、玉串を奉奠。参列者は二礼二拍手一礼で同拝した。参列者を代表して、小倉英夫理事、住友雅人理事、光安一夫理事、佐藤亨監事がおのおの玉串を捧げた。

撤饌、昇神を終えて神職が退場したあと、中原理事長・学長が、三十分の記念講演を行った（**四面に講演全文**）。

次に、本学創立百周年記念研究グラント授与式が行われた。このグラントは、独創性と新規性のある大規模な研究プロジェクトに対し、三年間に総額一億円の研究費を支給するもので、学内から七件の応募があった。

中原理事長・学長より選考結果が発表され、佐藤田鶴子教授（生命歯学部口腔外科学講座）を研究代表者とする「歯科再生医療のシステム構築と人材育成のための医歯工融合プログラム」が採択され、同教授に採択証書が手渡された。

これに対し、佐藤教授から「新しい図書館の正面に『世に立つに必要なことは、目的と見透しと努力の三つである』という、創立者中原市五郎先生の言葉が刻まれている。この教え、この精神こそが、私たちの研究を完成させるのだと思った。

現在は動物で顎骨感染モデルの治療に成功した段階だが、患者さんの治療にフィードバックして、顎骨を大きく切らずに済ませることが私たちの使命だ。臨床家の先生方の協力を得てはじめて研究が完成するので、今後ともご助力いただきたい」と謝辞を述べた。

ついで、式典に来賓として出席した本学名誉教授等が紹介され、拍手を浴びた。

つづいて、永年勤続者表彰に移り、三十年勤続者十一名、二十年勤続十七名に中原理事長・学長より賞状と記念品が授与された（**三面に被表彰者名**）。

永年勤続者を代表して酒井サヤカ教授（生命歯学部・哲学）が、「創立百周年の記念日に表彰していただき、誇らしい思いで一杯だ。三十年前を思い返すと、旧校舎中庭の丸い噴水の池で亀が甲羅乾ししていたこと、銀杏の大木など懐かしく思い出される。百周年の節目にあたり、豊かな成果を生み出し続けられるよう、今後とも職務に精励することを誓う」との謝辞を述べた。

終わりに、合唱部OBの西田紘一助教授（附属病院）の指揮により、全員で校歌を斉唱して正午に閉式した。

日本歯科大学新聞
東京千代田区富士見
日本歯科大学新聞会
発行兼編集人　中原　泉
発行日　偶数月末日
定　価　1部10円
編集室　（〒951-8580）
新潟市浜浦町1－8
☎025（267）1500

100周年館とつながり広くなったメモリアルホール、祝壇の背側は100周年館２期棟

拍手する中原理事長（中央）はじめ参会者

祝辞を述べる光安一夫校友会長（法人理事）

中締めの挨拶をする住友雅人法人理事

乾杯の発声をする小倉英夫法人理事

100周年記念館を見学

創立百周年記念式典終了後、参列者たちは本学教職員の先導により、竣工なった100周年記念館二期棟の各階を見学した。なかでも早稲田通りに面し、一・二階が吹き抜けになったヨーロッパ風の図書館、地下一階の劇場のような新しい九段ホールに、一同感嘆の声をあげた。

創立百周年を祝う記念祝賀会は、本館一階メモリアルホールにおいて、米澤庶務部長の司会により十二時半に開会した。

リードする気迫

はじめに、光安一夫校友会長が祝辞に立った。

「記念すべき本日の式典に参列させていただき、この感激は一生忘れることができない。校友会は創立百周年を迎えるにあたり、伝統と創造を掲げてきた。

この百年間、決して安易な日々が過ごせたわけではない。創設時代の苦労、そして大正十二年の関東大震災により、本学も壊滅的な被害を受けたが、旧に倍する復興を遂げた。しかし昭和二十年三月には東京大空襲があり、再び瓦礫に化してしまった。

専門学校から大学への昇格を図りながら、終戦直後の混乱の時期に立ち向かった先駆者の英断と努力には敬意を表するのみである。それにも増して大学、教職員、校友、関係者一同が心一つに、あらゆる難関に立ち向かう努力があったからこそ、百年の歴史の重みとなったのだろう。

すでに創造への第一歩は踏み出されている。歯科界をリードする気迫を失わず、二百年に向けて走りつづける決意を今日改めて誓い合いたい。わが日本歯科大学の伝統と創造が、二百年目の開学記念日にも語り継がれることを確信している」

先人に恥じぬ努力

ついで、小倉英夫理事が、「日本歯科大学は建学の精神として、自主独立そして自助努力をもっている。日本には百年続いた大学は幾つかあるが、自助努力で続けてこられた大学は、本学だけであろう。百周年のお祝いとともに、私たちには先人に恥じない努力が求められている。日本歯科大学のさらなる発展を祈念する」と述べ、乾杯の発声をした。

歓談の続くなか、六十六回卒業生一同より、育英奨学金が中原理事長・学長に寄贈された。ついで、祝電が披露された。

中締めでは、住友雅人理事が、「百周年に合わせて大学の機構改革や建築を行ったのではなく、世のなかの教育や臨床の流れのなかで改革が進められた。それが、たまたま百周年に一致しただけである」とユーモアを交えて挨拶した。

つづいて、三十四回卒の斎藤貞雄先生と、三十七回卒の朝比奈敏行先生が壇上に登り、専門学校時代や当時の校舎の想い出について語りあった。両先生の軽妙な掛け合いは、参会者の爆笑と拍手を誘った。

ここで斎藤先生の発声により、一同で万歳を三唱した。会場のあちこちに歓談の輪が広がり、みな語り尽くせぬ思いのなか、今秋の全国会員大会（校友会主催）での再会を約し、午後二時過ぎに散会した。

☆三十年勤続表彰

（生命歯学部）
酒井サヤカ（哲学）
米澤　登（庶務部）
嶋崎ひとみ（図書館）
（附属病院）
目黒トシ子（衛生士室）
（東京短大）
飯田　豊（事務室）
（新潟生命歯学部）
後藤真一（理工学）
赫多　清（理工学）
森　和久（口腔外科学Ⅱ）
羽下憲善（庶務部）
南　三枝（院務部）
（医科病院）
長谷川やすえ（中央検査科）

☆二十年勤続表彰

（生命歯学部）
松岡孝典（解剖学Ⅱ）
北田加代美（衛生学）
宮坂孝弘（口腔外科学）
（附属病院）
進藤美智子（総診科1）
横澤　茂（総診科3）
石田鉄光（総診科4）
本池由美子（病棟）
杉浦幹則（技工室）
内藤　明（技工室）
小林千登世（衛生士室）
（東京短大）
福田正臣（衛生学科）
（新潟生命歯学部）
種村　潔（化学）
曽我憲二（内科学）
（新潟病院）
福井佳代子（薬剤科）
清田えい子（看護科）
西野ヒサ（看護科）
榎　佳美（衛生士科）

客員教員

（生命歯学部）
歯学博士　中林　宣男
客員教授を委嘱する（歯科補綴学第二講座）
農学博士　鈴木　哲朗
工学博士　伊藤　敦夫
薬学博士　大野　忠夫
医学博士　清水　慶彦
客員教授を委嘱する（口腔外科学講座）
Dr. T・J・青葉
客員教授を委嘱する（歯科矯正学講座）
歯学博士　小口　春久
客員教授を委嘱する（小児歯科学講座）
Dr. 李　博淳
客員研究員を委嘱する（解剖学第二講座）
平成十八年四月一日
本学
博士（歯学）富井　信之
客員助教授を委嘱する（新潟病院総合診療科）
平成十八年五月一日
本学
Dr. 榎本　紘昭
客員教授を委嘱する（新潟病院総合診療科・口腔インプラントセンター）
平成十八年七月二十四日
本学

記念品3点作製

本学は、創立百周年式典に際し、記念品として本学関係の十枚の写真をおさめた記念切手、百周年ロゴマークを封じた九×五cm大の透明樹脂のペーパーウエイト、および日本歯科大学発祥の地を飾った十五cm大の木製時計を作製した。

左は時計、ロゴウェイト、右は記念切手

中原泉理事長・学長記念講演

日本歯科大学創立百周年、おめでとうございます。私は今朝ほど、大手町に建立された日本歯科大学発祥の地の記念碑に手を合わせて参りました。旧地名で東京市麹町区大手町二丁目一番地という、皇居の大手門を望む大手町の交差点です。東京の最高の場所に本学は創立された、という思いを新たにいたしました。本日は、お集まりの皆さまとともに、本学百年目の創立記念日に巡り合わせた幸せと歓びを分かち合いたいと存じます。

先日あるパーティーで歯科大学・歯学部の学長・学部長の方々と歓談をする機会がありました。卒業生の話になり、私は米寿会員が四十名いますと言いましたら、皆さんびっくりしていました。新設大学の学長さんは、うちは未だ還暦にもいってませんと、ため息をついておられました。私はつい調子にのり、白寿の校友は五名いると話すと、皆さんシーンとなってしまいました。今更ながら、歴史の重みを実感いたしました。

さて、中原實名誉学長は生前、本学は私立大学である、私立は自分から叫ばなければ誰も振り向いてくれない、と申しておりました。私どもは自ら大声で主張して、無理やりにでも世の中の人を振り向かせなければ、存在をアピールできないのです。私は自己ＰＲは苦手ですが、本日は創立百年の記念日ですので、精一杯の自画自賛をさせていただきたい。大言壮語になりますが、ご祝儀ということでお許しをいただきたいと存じます。

この二十年間で大学は二百五十も増えました。そして現在国公私立あわせて七百三十校という大変な数になっています。これは社会の多様性に対応したというと、大変聞こえがよいのですが、その多様性とは得体が知れない胡散臭いものなのです。文部省は一九八〇年代から特色ある学校づくりを提言し、教育改革の理念を学校の個性化ということで推進してきました。大学は特色を持てと言うのですが、実際問題として、この特色というのが分かったようで分からない、易しいようで極めて難しい注文です。

ある親しい文部科学省のＯＢに、それでは歯学部の特色は一体何ですかと尋ねましたら、即座に「歯科医の養成じゃないですか、それは他の学部ではできないでしょう」という答が返ってきました。七百三十校の大学全体から見ればその通りでしょうが、私が聞きたかったことは、他の学部との比較ではありません。歯学部二十九校の中での差別化の問題なのです。歯学部の競争相手はあくまで歯学部ですから、二十九校の中でどのような特色を出すか、それが私どもに突きつけられた課題なのです。

それに対して私は、二つの大きな特色をあげたいと思います。発祥の地の碑文にも刻まれていますが、学校法人日本歯科大学は生命歯学部と新潟生命歯学部の二つの歯学部をはじめとして、大学院が二つ、附属病院が三つ、短期大学が二つ、博物館一つを有する世界最大の歯科大学なのです。

この世界最大という話をしますと、学内や校友の先生は呆れ返ったような顔をして私を見つめます。なかには大げさなことを言いなさんな、と苦笑いをする方もいらっしゃいました。外国の大学は総合大学ですから、訪れると大きく立派です。その中に歯学部があるので大きく立派に見えますが、歯学部だけ取り出して見た場合にどうでしょうか。私どもには十五校の国際姉妹校がありますが、例えばオーストラリアのアデレード大学歯学部は、デパートメントは歯科学講座一つだけです。教授の定員は三名、教員の総数は十七名。アメリカのミシガン大学歯学部でさえ、講座は五講座しかありません。これはどこの国も似たり寄ったりです。

日本はどこの歯学部も基礎系九講座を有していると外国の人に話すと、もう目を丸くします。なんでそんなに揃えなくてはならないんだという感じですが、基礎系の全講座が揃っている歯学部は日本だけでしょう。日本ほど規模の大きな歯学部はありません。

その中で日本歯科大学は、三つの大学を有しております。日本歯科大学、日本歯科大学東京短期大学、日本歯科大学新潟短期大学、本学には三人の学長がいるのです。学生の総数はあわせて約二千名、専任教職員は約千名と、さらに現存する卒業生の総数は一万二千人を越えているでしょう。決して大風呂敷ではなく、歯科大学としては世界最大です。これが本学の第一の特色です。

第二の特色は、日本獣医畜産大学という獣医学の非常に古い大学がありますが、この四月一日に日本獣医生命科学大学と校名を変更しました。ちょうど十年前に東京薬科大学が生命科学部を新設しました。生命という名称を用いたのはここが最初だろうと思いますが、そのあと農学部、理工学部、獣医学部と次々に生命を冠する名称が誕生しました。

私ども歯学部はノホホンとしていた、ノンビリしすぎていたのです。出遅れたのです。医師・歯科医師のみが人体という生命体に直接的に医学的侵襲行為を行える立場にあります。歯科医学は生命体を学ぶ学問であり、歯科医療は生命体への医行為です。だから、歯学部こそ生命を謳うにふさわしい学部なのです。

今や、良くも悪しくもネーミングの時代です。生命歯学部と聞きますと、子供さんでも、歯科は生命、いのちと関係あるのだと思います。名は体を表わすということで、この名称だけで歯学部の本質を理解してもらえます。歯科医師は生命体を診療する医者だという認識を、一般の人に自然に持ってもらえるようになります。

今年の入学試験の面接では、「生命歯学部」という名前が気に入りましたと言ってくれた受験生が何人もおりました。先日新潟の病院長あてに入院患者の家族の方から礼状が届きました。それには、「四月一日より学部の名称が生命歯学部に変わるそうですが、父が入院していたときはもう既に生命歯学としての医療が行われていたこと、心のケアをしていただいたことに感謝しております。すてきな人たちに一生懸命にみていただき、病人も家族も救われました。ありがとうございました」という礼状をいただいております。

この生命歯学部は、現在二十九歯学部の中で日本歯科大学のみです。諸外国でライフ・デンティストリーを用いているところはありません。ライフ・デンティストリーは、本学がオンリー・ワンなのです。世界で唯一の生命歯学部、これが本学の二つ目の特色です。

さて、百周年記念館の、二期工事が竣工し、昨日鹿島建設より建物の引き渡しを受けました。あとは裏側の二号館、三号館の解体と外溝工事が残っていますが、建物の工事は全て完了しました。学生諸君は六月五日から記念館の新しい教室を使います。図書館は、六月中旬までに移動を終えて開館します。四年かかりましたが、東京キャンパスの再整備はソフト面もハード面も完了しました。

「先生、大学は大きいばかりがいいわけじゃありません、ハコ物ばかり作っていてはいけません」と忠告して下さる方がおりました。大真面目なものですから、私も仕方なくハイハイ、分かりましたと対応しましたが、外見より中身だということは、子供にでも分かることなんです。

大学としての教育環境、研究環境、診療環境を整備することが私の役目でした。その環境づくりは一応終わりました。あれが足りないこれが足りない、これはダメだというのは多々あろうかと思いますが、私としては環境づくりは一応完了したと考えております。あとは、その新しい環境をいかに活用するかということです。それは、全教職員のやる気と能力次第です。やる気も能力もなければ、宝の持ち腐れになってしまいます。

私は百年の伝統を築いた先人たちに、世界最高の歯科大学にするということを誓って、一〇一年への新たなスタートにしたいと願っております。それには全教職員の方々、また卒業生の方々、皆さんのご協力を得なければできません。皆さんに、このことを深くお願い申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

世界最大の歯科大学
世界唯一の生命歯学